

# 誰がどのくらい大学図書館を利用しているのか

三根慎二<sup>†</sup>

†三重大学 人文学部  
mine.shinji@mie-u.ac.jp

上田修一<sup>‡</sup>

‡立教大学 文学部  
uedas@rikkyo.ac.jp

## 抄録

日本の大学生による大学図書館の利用動向を把握するために、学生生活実態調査報告と大学図書館入館データの分析を行った。その結果、前者から大学生の8割近くが利用している、週一回以上の利用者は半数以下であること、後者からは入館回数はロングテールの傾向を示し、入館率は文理低および学部と大学院との間に顕著な差があることがわかった。後者の入館頻度は実態調査報告より顕著に少なく、入館データに基づく利用調査の必要性を指摘した。

## 1. はじめに

大学図書館は、研究と教育の両面で大学の使命とかかわっており、その関わり方は時代によって異なる。しかし、現在でも、大学図書館は、利用者は、図書館という建物に赴いて図書館資料を利用するなどを暗黙のうちに期待している。現に大学図書館は様々な形で利用実態の把握を行っている。最近ではIR(Institutional Research)やラーニング・アナリティクスの観点からも、学生の大学図書館の利用実態を表すデータを収集分析する必要性が指摘されて始めている<sup>1,2)</sup>。大学図書館は、従来から業務データという形で膨大なデータを収集蓄積してきたが、多くは単純集計にとどまることが多い、大学図書館・図書館員によるデータ分析は不十分であり、機能不全に陥っているという指摘もある<sup>3)</sup>。

大学運営の視点からみると図書館利用の基礎データとして、まず、図書館を利用する学生の全学生に占める割合、利用する学生の特性の把握が必要と考えられる。従来、大学図書館に来館する学生を対象とした調査が行われてきたが、来館者調査からは、図書館を利用している学生の特色が判明するにとどまる<sup>4)</sup>。また、LibQUAL+®の附帯調査で全学生を対象として

図書館利用頻度を尋ねるとといった例<sup>5)</sup>もあるが、図書館が行う調査であれば、図書館に関心のある学生が回答するという傾向は否めない。

本研究では、

学生生活実態調査報告および図書館入館データという比較的容易に入手できる大学図書館の利用に関するデータに基づいて、大学図書館の利用実態について一般的動向を把握するとともに、新しい指標に基づいた利用パターンを明らかにすることを目的とする。

## 2. 学生生活実態調査報告を用いた調査

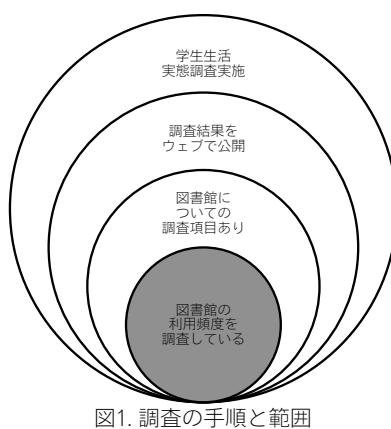
### (1) 目的

国内の大学で行われている学生生活実態調査の結果を用いて、図書館利用の頻度を調査する。学生生活実態調査は、大学が学生の経済的困窮度を調べることを目的に1950年代から行われてきた質問紙調査であるが、現在では、大学運営ばかりではなく、大学評価やIRと結びつき、学生から志望動機、授業、勉強、留学、アルバイト、サークル、就職、経済状況、日常生活、健康など幅広い情報を収集している。こうした調査の実施状況は明らかではないが、多くの大学で実施されていると推測できる。

なお個別の大学の他に、日本私立大学連盟が加盟大学の学部学生を対象に4年ごとに学生生活実態調査を実施しており、2010年度に行われた調査をまとめた「学生生活白書2011」では、平均的な一日の図書館・コンピュータ室の利用時間は平均1時間15分と報告している。また、全国大学生活協同組合連合も毎年全国の国公私立大学の学生を対象に生活実態調査を行っているが、最近は図書館利用を調査していない。

### (2) 方法

手順を図1に示した。CiNii Booksによる検索で65件、ウェブによる探索では64件の調査報告例が見付かった。印刷版の調査報告のほとんどは、実施大学の図書館においてのみ所蔵され



ており、外部からの利用は困難である。また、最近では、薬物、健康、あるいはハラスメントなどについても尋ねることがあり、多くの大学は外部公開に消極的である。しかし、ウェブで調査結果を公開している大学もある。その中で図書館利用について設問のあるのは34大学で、図書館の利用頻度を尋ねているのは19大学である。これらを表1に示したが、国立大学が公開に積極的であり、図書館とその利用についても調査することが多い。

表1 学生活実態調査の報告（単位：大学）

種類	公開	図書館	利用頻度	大学数
国立	39	25	15	84
公立	7	0	0	86
私立	18	9	4	605
計	64	34	19	775

図書館の利用頻度を尋ねている19大学は以下の通りである。

藍野大学(2014)、秋田大学(2010)\*、香川大学(2011)\*、鹿児島大学(2011)\*、神奈川大学(2013)、京都大学(2013)、京都教育大学(2013)、佐賀大学(2007)\*、滋賀医科大学(2014)、静岡大学(2009)\*、千葉大学(2012)\*、東京工業大学(2012)、東京農工大学(2012)、徳島大学(2013)\*、新潟大学(2010)\*、兵庫教育大学(2012)、弘前大学(2010)\*、北海学園大学(2013)、桃山学院大学(2012)

大学の運営や、規模、環境をそろえるため、この中から国立大学の中で、似た性格を持つ9大学(\*で示した)を調査対象とした。いずれの大学も学期中の図書館利用の頻度について、ほとんど毎日、週に2~3回程度利用している、週に1回程度利用している、月に1~2回程度利用している、ほとんど利用していないといった選択肢を設けて回答を求めていた。しかし、大学

表2 学生活実態調査における大学図書館の利用頻度

大学	年	学部数	キャンパス数	調査	回答数	回収率(%)	図書館の利用頻度の割合(%)			
							週1回以上	月1回以上	ほとんど利用せず	
A	2007	5	2	標本	451	29.2	6.0	37.2	64.0	36.1
B	2009	6	2	悉皆	6,604	63.4	2.8	42.9	82.9	17.2
C	2010	5	4	悉皆	1,154	21.0	2.8	51.8	73.7	26.3
D	2010	4	3	悉皆	882	59.7	5.8	45.8	73.1	26.9
E	2010	9	2	標本	552	27.9	1.2	31.4	64.5	35.5
F	2011	6	4	悉皆	408	7.2	7.0	39.0	71.0	29.0
G	2011	8	3	悉皆	4,189	-	6.6	53.9	81.8	18.1
H	2012	9	4	悉皆	1,058	-	6.3	48.2	81.7	15.3
I	2013	5	3	悉皆	4,060	69.5	7.0	45.0	84.0	16.0

によって選択肢の分け方は異なっており、4区分から6区分まである。

### (3) 結果

調査結果を表2に示した。4学部から9学部まででいずれも文と理の学部を含んでいる。キャンパスは2から4か所の範囲である。悉皆調査が多いが、回答数が少ない例もある。図書館の利用頻度は、ほぼ毎日、週1回以上、月1回以上、ほとんど利用せずの4区分に再集計した。なお、「週1回以上」には「ほぼ毎日」を含み、「月1回以上」も同様である。

まず、注目されるのは、「ほぼ毎日」(これには、毎日、ほぼ毎日、ほとんど毎日、週に6日以上、週4回以上、という選択肢が含まれる)と答えた学生が、6大学で6~7%もいることである。多くの大学で図書館を頻繁に利用する学生が、数百人の規模で存在している。この調査からは、利用行動は判明しないが、大学図書館の中核となる学生であると言える。

一方では、「ほとんど利用せず」(利用しない、ほとんど利用しない、ほとんど利用していない、ほとんどなし、ほとんどない、含む)は、15.3%~36.1%と幅があるが、17%前後と30%前後に二分される。全く図書館を利用しない学生が3割を占める大学が半数ある。月1回以上の利用があれば、図書館利用者とするなら、8割近くが図書館利用者である。しかし、図書館をよく利用していると言えるのは、週1回以上の利用者であろう。こうした利用者は、全体としては、半数に満たないと言えよう。

## 3. 図書館入館データを用いた調査

### (1)目的

学生活実態調査報告を用いた調査から、大

学生の図書館利用頻度の一般的傾向としては、8割近くが利用している、週一回以上の利用者は半数以下といったものが考えられ、これらの傾向は性格の似た大学においてもおおむね当てはまると考えられる。しかし、大学図書館の利用頻度という客観的な事実項目を測定する際に、回答者の自己申告に基づく質問紙調査では、回答者の偏りや回答者が回答を「知らない」「思い出せない」「答えたくない」といったバイアスが生じることは避けられず、測定の妥当性の前提条件が担保されているとは言えない。そこで次に、先の大学生の図書館利用に関する一般的傾向は当てはまるという仮説のもと、大学図書館が収集している入館全データという客観的かつ大規模なデータを分析する。これらの分析を通して、学生の図書館利用傾向を明らかにし、仮説を検証することが目的である。

### (2)方法

調査対象は、三重大学附属図書館および医学部図書館の2013年度入館データ全件である。同データに含まれる学部生・大学院生（正規生のみ）のデータを、全構成員が含まれる利用者マスターファイルに基づいて抽出し（表3）、375,498件を分析対象とした。なお、地域イノベーション学研究科は、学部を持たないため対象外とした。入館データには、学籍番号を匿名ランダム化したIDとそれに対応する入館の日時、入学年度、所属学部および学科が含まれている。

調査項目は、利用者の入館回数および入館率である。両者に対して全体の単純集計を行うとともに、1) 課程、2) 入学年度、3) 部局別の集計を行った。

### (3)結果

#### a. 入館回数（表4）

入館回数の概要を表4にまとめた。学生の入館回数を降順に並べたのが図2であり、最大1529回から最低0回の幅があり、上位20%で入館回数全体の60%，上位37%で80%を占めることがわかった。

利用頻度という観点から、学生の利用頻度の分布を示したのが、図3である。ここでは、授業および試験期間の平日において、a. 毎日（160日）、b. 週単位（36週）、c. 月単位（10ヶ月）で、最低一回でも入館した学生の割合を示して

いる。毎日入館は0%，毎週入館は0.8%，毎月入館は17.9%であり、学生生活実態調査報告の結果とは、顕著な差が見られる。

#### b. 入館率（表4）

図書館の入館率は、全体で90.1%であり、学生生活実態調査報告の結果ほど低くはなかった。学部（94.5%）と大学院（78.6%，38.4%）では大きな差があり、部局別では全学部が9割以上であるが、大学院になると文高理低の傾向が見られる。学年別に見ると、B1は5月1日時点ですでに9割に達していること（図4），学年が上がるにつれて入館率が減少することが特徴的である。

以上の結果から、調査対象大学の学生のほとんどは1年度内に図書館に入館しているが、入館頻度は学生生活実態調査報告で見られたような高いレベルではないことがわかった。

表3. 調査対象の概要

	学部	大学院	学年	人数
人文	1,263	34	B1	1,451
教育	853	98	B2	1,460
医	1,076	239	B3	1,390
工	1,821	556	B4	1,319
生物資源	1,105	255	B5以上	498
地域イノベーション	-	43	M1	415
	6,118	1,225	M2以上	495
			D1	86
			D2	86
総計		7,343	D3以上	143

## 4. 議論と結論

今回の調査から、学生生活実態調査報告および図書館入館データによって、大学図書館の利用に関する幾つかの傾向が見いだされた。しかし、学生生活実態調査報告に基づく仮説が入館データの分析では実証されないものもあった。理由として、たとえば、1) 三重大学の図書館利用が特別に低い、2) 調査方法の問題が考えられる。前者は、三重大学は学生生活実態調査報告対象大学と性格が似ており考えられない。後者は、学生生活実態調査報告という質問紙調査では、学生は図書館利用頻度の質問に対して何らかのバイアスが働き、実態と異なる回答をしている可能性もある。大学生の図書館利用の実態を知るには、従来のような利用者の自己申告による調査方法では限界がある。今後は、図書館入館データの分析を積み重ね、比較可能な利用の指標を確立する必要があると考えられる。

## 謝辞

本研究の着手・実施にあたり、多くの支援を受けた三重大学附属図書館吉岡基元館長、医学部図書館成田正明館長、両図書館職員の皆さんに感謝致します。本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「全体論的アプローチによる図書館利用者像と利用要因の基礎的研究」(15K00453)の支援を受けています。

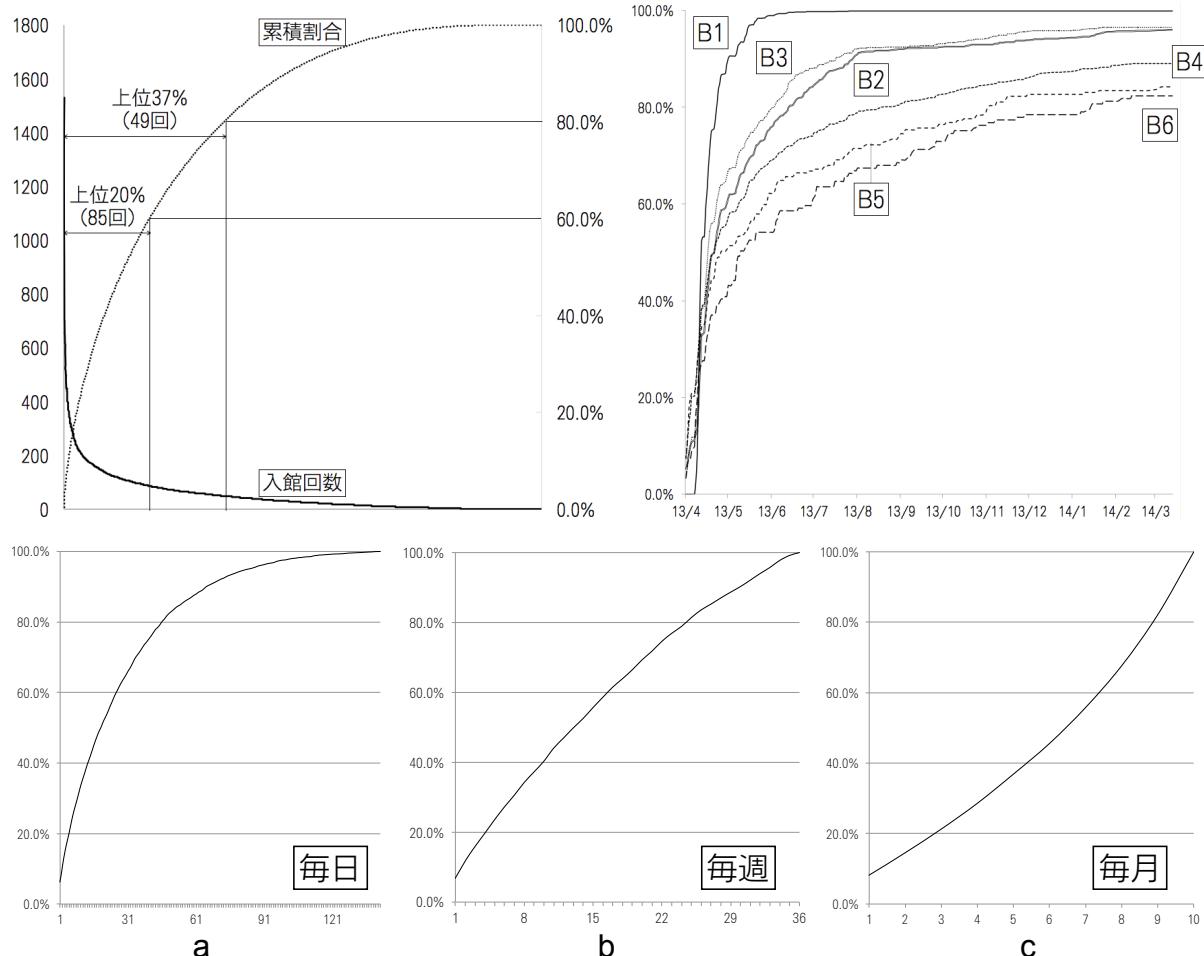
本研究は、三重大学医学系研究科研究倫理審査委員会での承認(No.1463)を受けて実施した。

## 引用文献

- 古橋英枝. 大学生の学習実態に基づく大学図書館の役割. *Library and Information Science*. 2014, No. 72, p. 95-123.
- Stephen Town, J.; Stone G.; Collins E. Library usage and demographic characteristics of undergraduate students in a UK university. *Performance Measurement and Metrics*. 2013, Vol. 14, No. 1, p. 25-35.
- Brooks-Kieffer, J. "Yielding to Persuasion: Library Data's Hazardous Surfaces". *Library data : empowering practice and persuasion*. Orcutt, D. eds. Libraries Unlimited, 2010, p. 3-16.
- Coello Alicia, A.; Simon Martin, J. Student use of the library at the Complutense University of Madrid. *Revista española de Documentación Científica*, 2008, Vol.31, No.3 p.413-431.
- 酒井由紀子, 上岡真紀子. 慶應義塾大学におけるLibQUAL+結果と分析. *MediaNet*. 2009, No. 16, p. 12-16.

表4. 入館回数と入館率の概要

入館回数	全体会	課程			学年									学部			大学院						
		学部	修士	博士	B1	B2	B3	B4	M1	M2	D1	D2	D3	人	教	医	工	生資	人	教	医	工	生資
合計	375,498	361,183	13,202	1,113	106,978	80,761	84,414	63,020	6,553	6,007	263	303	557	90,179	35,662	108,405	82,753	44,184	1,874	3,218	1,341	4,208	3,368
平均	51.1	59.0	14.5	3.5	73.7	55.3	60.7	47.8	15.8	13.4	2.9	3.5	3.9	71.4	41.8	100.7	45.4	40.0	55.1	32.8	5.6	7.6	13.2
最大	1,529	1,529	249	131	609	1,529	975	1,219	249	221	44	45	131	712	450	1,529	533	388	249	179	80	221	141
最小	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中央値	26	34	5	0	55	31	36	16	6	3	0	0	0	49	30	59	23	23	40	19	0	2	5
標準偏差	78.1	82.6	26.6	10.7	65.6	83.1	79.3	92.3	26.6	26.7	7.0	8.2	13.6	80.1	46.4	136.6	57.6	49.6	53.3	37.4	12.4	18.1	22.3
入館率	90.1%	94.5%	78.6%	38.4%	99.9%	96.0%	96.5%	89.5%	83.6%	74.2%	40.7%	44.2%	38.6%	96.0%	96.8%	98.5%	90.2%	93.9%	94.1%	95.9%	45.6%	68.0%	76.5%



左上から逆時計回り. 図2. 入館回数の分布. 図3. 授業および試験期間の平日の入館率の分布. 図4. 学年別の入館率の推移